

國分麻里著『植民地期朝鮮の歴史教育 「朝鮮事歴」の教授をめぐる』

神田基成*

本書は、日本と朝鮮半島とによこたわる「兩岸関係」の諸問題について、その起源を探る際の一助となる労作である。著者は、中学校で教壇に立った経験から、日本における「在日コリアン」の問題を起点として植民地期朝鮮の歴史教育に関心をもったという。そうした現場での経験に基づいた研究姿勢が本書には貫かれている。朝鮮植民地教育史学の分野は、これまで政策・教科書を主な学究対象としながら、実践の現場を対象とすることは難しかった。歴史教育についても、戦後から1980年代までの研究は、総督府の制度や政策とその対立項としての朝鮮人の抵抗という図式が中心であった。1990年代以後は、「侵略-抵抗」の枠組みにとどまらない多様な研究が模索され、総督府の統計資料に加え学校の名簿、同窓会資料などを用いた児童・教師の実態把握や教科教育研究という教室レベルをも対象としてきた。研究環境の整備や研究者の関心の拡大が現場の実践を研究することを可能にし、研究の幅を広げてきたのである。しかし、歴史教育、とりわけ朝鮮事歴の取り扱いについては、先行研究における扱いが限定的かつ簡略化されていて体系的な研究が進んでいるとはいえない状況であった。

本書は、1920年代初頭から1941年に教科書叙述から削除されるまでの朝鮮事歴をテーマとしている。朝鮮事歴とは、朝鮮総督府編纂の歴史教科書に叙述されている王朝史中心の朝鮮歴史のことである。この内容を含む歴史教科書は、朝鮮人児童が通う普通学校で使用された。本書は、そのような教科書叙述の詳細な検討および教師を含む教育関係者の言説や認識、またそれ

らの時系列的な変遷を郷土史教育との関わりに注視しながら丹念に追いかけているところに特色がある。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第一章 朝鮮事歴の形成

第一節 三・一独立運動の影響と朝鮮事歴の教授開始

第二節 朝鮮事歴教授の目的

第三節 朝鮮事歴の分析

第二章 郷土史教授の特性による朝鮮事歴の再構成

第一節 一九二二・二三年版教科書に見る「教育の郷土化」の受容

第二節 朝鮮事歴の分析

第三節 朝鮮事歴に対する教師の反応とその背景

第三章 朝鮮事歴の郷土史からの逸脱

第一節 郷土教育運動の流入と郷土教育の進展

第二節 郷土史教授に対する教師の認識と授業実践の実際

第三節 朝鮮事歴の郷土史からの逸脱

第四節 朝鮮事歴の分析

第四章 朝鮮事歴の削除

第一節 朝鮮歴史教授事件と在朝日本人による朝鮮事歴批判

第二節 臨時歴史教科用図書調査委員会の設置と郷土化の強化

第三節 朝鮮事歴の削除

第五章 郷土史教授の特性からみた朝鮮事歴の歴史の意味

第一節 総督府の教授意図と教科書叙述および教授内容の乖離

第二節 朝鮮事歴・郷土史・日本歴史の関係

* 鎌倉学園中学校・高等学校

終章

以下に概要をまとめる。序章では先行研究、研究の目的と方法・論文構成が示されている。

第一章では、1919年～1922年の朝鮮事歴の形成過程と構成要素、および叙述内容を明らかにしている。1922年、朝鮮総督府学務部主導で作成された教育令で「日本歴史」が設定された。ここで朝鮮事歴が教えられることになるが、この方針転換を促したのは三・一独立運動であった。歴史教育関係者には、「『日本歴史』と『朝鮮歴史』を一本化しない方が良い。」と主張するものもいれば、「総督府は積極的に朝鮮事歴を教授する立場であり、それにより植民地統治の正当性を教えることができる。」と主張するものもいた。結局、総督府により『補充教材』が作成され、それは内地の内容と朝鮮の内容とを含んでいた。こうして、都合良く読み替えた朝鮮歴史である朝鮮事歴を入れることで日本統治に反抗しない朝鮮人の育成を目指したのである。

第二章では、1922・23年の『普通学校国史』編纂に伴う朝鮮事歴の、郷土史教授の特性による再構成の過程を明らかにしている。内地では1910年以降、郷土史という言葉が普及し民間、官界ともに郷土研究が活発化していた。内地での教育の郷土化の流れを受けて、朝鮮でも教科書編集の際に独自の内容にしていく方針がとられるようになる。1922・23年版『普通学校国史』では、郷土史教授の特性を利用して朝鮮事歴を大日本帝国の一部に取り込もうとした。総督府は普通学校国史において朝鮮事歴を日本の一郷土史とみなしたが、教師側からすれば、総督府の意図は教科書叙述には反映されておらず、かえって朝鮮歴史の系統性や優秀性などの独自性を浮かび上がらせていたため、総督府と関係の深い朝鮮教育会に所属する教師集団は、朝鮮事歴叙述の改善を求めている。

第三章では、1932・33年の『普通学校国史』改訂に伴って朝鮮事歴の分量が増えたために日本歴史と同等の独立単元化がなされた結果、郷

土史という位置づけから逸脱していく過程を明らかにしている。1930年前後の朝鮮では、内地の郷土教育運動と以前からの朝鮮における郷土教育に対する関心とが合致。「主観的な郷土よりはじめて、国家へと拡大する」という意見もあり、愛郷心の醸成ひいては愛国心の形成が期待された。しかし、教科書における構成をみれば明らかのように、朝鮮事歴が日本歴史と対等であることを自ら示すこととなり、日本歴史の郷土史という従属的な位置からの逸脱を招く結果となった。さらに、この時期には日本歴史と関係のある郷土史を用いることで朝鮮人児童に日本歴史に興味関心を引かせることが目指されていたことも明らかにされている。

第四章では、1934年からの在朝日本人からの朝鮮事歴に対する批判を受け、改訂された『普通学校国史』において朝鮮事歴の郷土化が強化され、最終的には朝鮮事歴が教科書叙述から削除される過程を明らかにしている。1934年、朝鮮人生徒の通う京城中央高等普通学校で朝鮮歴史のパンフレットを作成して必要以上に朝鮮の歴史を教授していたことが事件となった。これに端を発して、朝鮮事歴に対して政策転換が図られた。京城帝国大学総長の山田三良が建議書を提出し、設立された臨時歴史教科用図書調査委員会で朝鮮事歴が検討され、改訂された1937年版『普通学校国史』においては、朝鮮の独自性を示す叙述を中心に朝鮮事歴を削減する反面、日本との関係を叙述した箇所は残したのである。さらに1938年、朝鮮教育令が改正されると、朝鮮事歴教授の根拠となっていた規定内容が削除されたため、1941年編纂の『初等国史』では朝鮮事歴の叙述は削除されてしまった。

第五章では、本書における考察として、1920年代初頭より日本歴史の郷土史として教授された朝鮮事歴の歴史的意味を、郷土史教授の特性から明らかにしている。そもそも、朝鮮事歴を日本歴史の郷土史として教授すること自体に危険性があった。つまり、朝鮮事歴には「中央史

を具体化した歴史」という面もあれば、「各地方の特色ある歴史」という面の両義性があったにもかかわらず、郷土史として教科書に組み込んでしまったために、実践のなかでは、児童に伝えたくなかった「郷土の特殊性を強調した歴史」をもあらわにしてしまったとしている。

終章では、研究のまとめと課題が示されている。課題については、植民地期以前と1945年の解放後の郷土史教授および韓国史教育と植民地期の連続・非連続、朝鮮事歴および郷土史教授の具体的な地域での重層的な検討、同時代の他の植民地や占領地での歴史教育および郷土史教授との比較研究の三点を挙げている。

本書が示唆に富むのは、朝鮮事歴の教授によって明らかとなる総督府の意図と実際の教科書叙述との乖離、さらには現場も含めた歴史教育関係者の認識の相違である。総督府の政策により教科書叙述の内容が変遷した過程を、総督府官僚の記録を分析して明らかにした点もさることながら、それぞれの時期の現場教師の朝鮮事歴教材観をも分析した点は非常に興味深い。現場の教師たちは、日本歴史の内容に馴染みのない朝鮮人児童をいかに授業に引き込むか苦勞したに違いない。そのため、教授目的としての朝鮮事歴だけでなく、教授方法としての朝鮮事歴に指導の活路を見いだしていた。一方で、筆者によって今後の課題にも示されているが、例えば日本統治時代の台湾における歴史教材の取り上げ方はどうだったのであろうか。親日の源泉がそこにあるのか、評者としても興味を覚える。

さらに、本書のテーマは現代的であるとさえ言える。現代においても郷土史の重要性と有効性は広く認知されている。また、世界史においては、世界と日本との関わりを強く意識するような指導方針を文部科学省は打ち出している。グローバル化が叫ばれて久しい現代における歴史教育、日本史学習のみならず世界史学習においても、置き換えることのできる問題だと感じる。朝鮮事歴を事例としている本書は、古くて新し

い郷土史学習の有効性・可能性や取り扱い上の注意点だけでなく、歴史教科書の叙述内容を検討する文教官僚と教育現場の教師との意識の乖離が歴史の普遍であるということも教えているのではあるまいか。

植民地教育史学において実証研究の成果を示すとともに、教育行政の変わらぬ問題をあぶりだしたともいえる本書は、日々、研鑽に励む現場教師だけでなく、文教行政に携わる方々にも一読することをお勧めしたい貴重な著作である。

(新幹社, 2010年12月刊, 251頁, 3,500円)